

第5章 白河北殿跡比定地 AA18 区の試掘調査

岡田保良

1 調査の目的

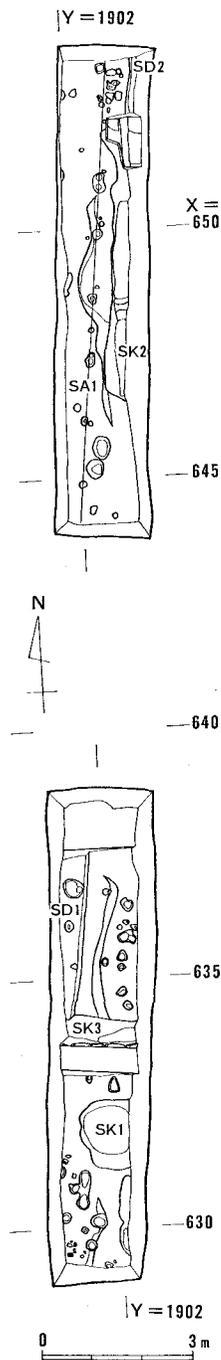
去る昭和51年度から52年度にかけて、京大病院構内では、AE15区、AH17区、AF14区の3ヶ所において発掘調査をおこない、平安時代末期を中心とする多数の遺構、遺物を出土した〔京大調査会77、京大埋文研78a〕。これらは院政期に展開をみた六勝寺や院の御所と密接な関係のある遺跡である。ところが、院の御所である白河南殿、白河北殿およびそれらに付随する御堂の跡地に比定されている春日通り以南、東大路通り以西の地域〔杉山62〕では未だに平安時代の良好な遺構や遺物包含層が検出されておらず、京大病院遺跡の性格を明らかにするには、満足な資料に欠けるところがあった。なかでも京都大学熊野寮構内は、白河北殿跡の一部をしめると推定され、御所の建築の構成や白河条坊を見きわめるための要所であり、その北方にあたる京大病院遺跡との関係の上でも興味深い地点である。しかし、本構内は戦後京都大学が取得した敷地で、昭和31年に教育学部校舎が、同40年には現在の寮舎が建設されており、それ以前にも紡績工場その他の社屋が建てられていたため、地下の遺構、層序の保存状態に関して悲観的な見方すらあった。

今回の試掘調査は、こうした遺跡の現状を的確に把握し、今後の調査研究の基礎的資料を得る目的で実施したものである。

2 層位と遺構

調査地点は、寮舎東側の空地で、既設園路に平行させて2つのトレンチを設定した(図版1-49)。各トレンチは東西2m、南北10mの規模で5mの間隔をおく。それぞれ北トレンチ、南トレンチと仮称する。表土掘削から埋め戻しまで、すべて人力でおこない、遺構平面および壁面層位の実測については、予め設置した基準点によって京大構内座標を割り付けておこなった。昭和53年2月20日に調査を開始し、同3月15日に現場作業を終了した。

現地表面は、標高46.8~47.0mで、北に面する丸太町通り路面より0.7~0.8m高い。地表から地山とみられる青灰色シルト層(第9層)まで、2.0~2.2mをはかり、その間は近代以降の厚い盛土または整地層(第1~第3層)、江戸後期以降の耕作土(第4~第6層)、さらに平安末期乃至鎌倉前期の堆積(第7・8層)に大別できる(第39図)。第9層上面はかなり起伏があり、北トレンチ北部では東下がり、南トレンチ南部では西下がりの傾斜をもち、調査地点が、平安末期以前には方位を若干東にふる帯状の凹地であったと推定できる。



第38図 遺構平面

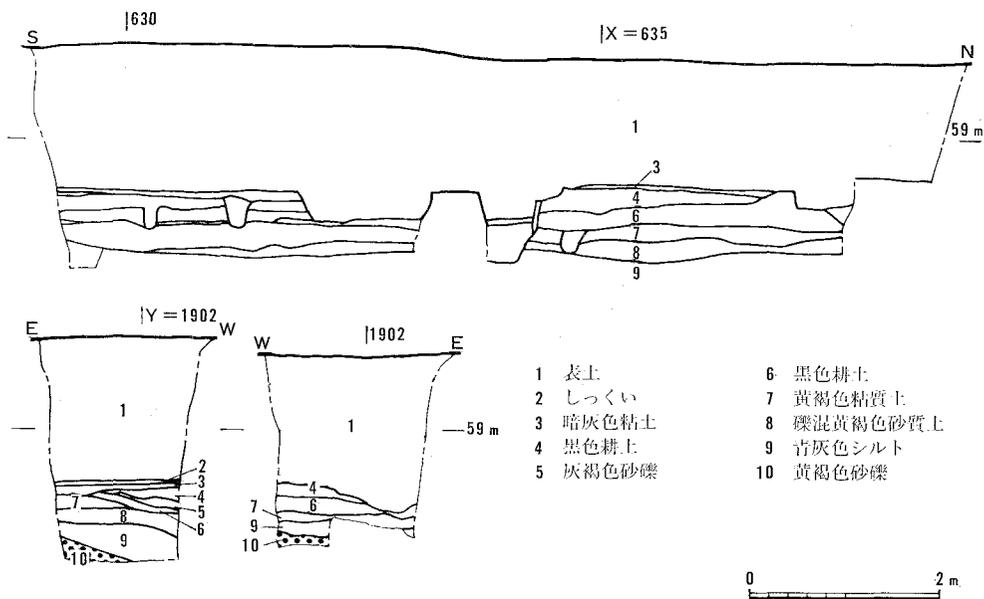
この上面から溝 SD1, SD2 を検出した。これらの溝や凹地の大部分には第8層の堆積をみる。その上に第7層がうすくの。江戸後期の耕作土は土地をかなり削平したのちに堆積したものであろう。第3層は、軟弱な耕作土の上にしっくい(第2層)をおくために整地した際に入れた粘土と考えている。その年代は、確証はないが明治以降のものともみている。

検出した遺構は、溝 SD1, SD2 のほか、同時代と考える小ピットが、平安時代から鎌倉時代にかけてのもので、江戸時代の遺構として、第7層上面で検出した柱列 SA1, 土坑 SK2, SK3 があり、北トレンチ中央の耕作土より、小規模な石垣を検出した。溝 SD1 は南トレンチの西壁沿いにその東肩を検出したもので、約 8° 方位を東に振る。トレンチの範囲は西肩には及んでいない。埋土の中から、宝相華唐草文軒平瓦 1 点をはじめ、瓦片と土師器を出土した。溝 SD2 は、北トレンチ東北部にわずかにその西肩を検出したにすぎない。柱列 SA1 は、北トレンチ内で 1.2m 間隔で 8ヶ所の柱穴跡が南北に 1 列にならぶが、建物跡とはみなし難く、耕作に伴う柵の跡と考えている。土坑 SK1 は一部南トレンチの東壁にかかるが、直径 1.3m, 深さ 0.6m をはかる円形の落ち込みである。その壁はほぼ鉛直であり、井戸であった可能性が強い。埋土は砂礫を多く含み、染付類など、江戸時代後半の遺物を少量出土した。土坑 SK2, SK3 はそれぞれ深さ 0.65m, 0.8m をはかる落ち込みで、多数の陶磁器を出土している。しっくいをおいた頃の遺構であろう。

3 遺物

第7・8層からは平安末期から鎌倉時代にかけての土師器、陶器、瓦類のほか、畿内第V様式 1 点(第41図 M12)を含む弥生土器の小片が数点出土した(図版15-4)。近世以降の堆積土層からは、多数の陶磁器、土製品、瓦類が出土し、都合コンテナ 7 箱分の遺物を採集した。

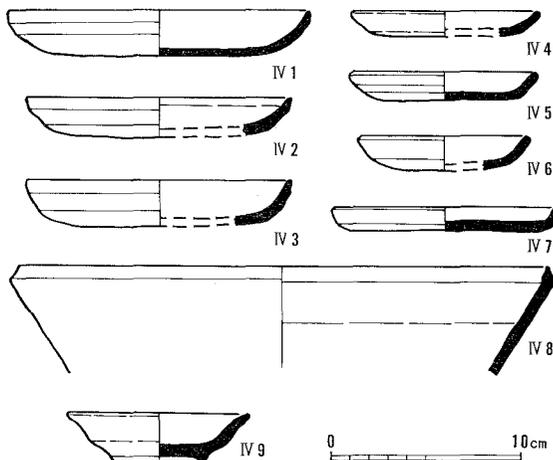
第7・8層から出土した土師器は皿だけである(第40図 N1~



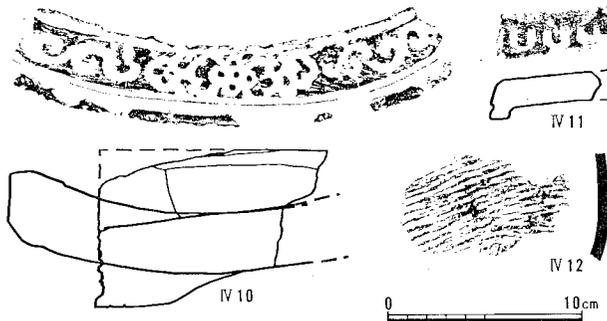
第39図 南トレンチ西壁(上), 南壁(下左), 北トレンチ北壁(下右)の層位

7)。Ⅳ4が第8層の出土で他は第7層から出土した。直径が14~16cmの大皿(Ⅳ1~3)と9~10cmの小皿(Ⅳ4~6)がセットになるようである。大皿では口縁部に2段の横撫を施し、上段の撫では端部をやや外反気味につまみあげるように成形する。小皿は口縁部の撫でが1段または2段で、端部に面をとる例(Ⅳ5・6)もある。Ⅳ7は扁平な底部をもち、口縁部を短くまっすぐに立ち上げる。蓋として用いたかもしれない。

その他の土器のうち、Ⅳ8は第8層から出土した須恵質大平鉢である。口縁部はやや肥厚し、端面内側をつまみあげるように撫でる。Ⅳ9は第7層から出土した灰釉系の皿である。底部は糸切りののち高台をはりつけ、畳付けの面には藁の圧痕をみとめる。体部はふくらみをもち、口縁部が外反するなどの特徴は12世紀前半の製品にみ



第40図 第7・8層出土の土器



第41図 瓦と弥生土器

ることができる。
瓦類は溝 SD1 から比較的まとまって出土しており、その中に宝相華唐草文軒平瓦 (V10)がある。瓦当中央に宝相華を、その両側に稚拙な唐草文を陰刻して配する。側面および瓦当上下面は篋削りによって成形し、平瓦部凸面全面と凹面両端部を撫でる。12世紀中・後葉の讃岐産の製品である可能性が強い。V11は第7層出土の剣頭文軒平瓦である。瓦当は折り曲げにより、凹凸両面、側面および頸部を撫で、凹面から瓦当にかけて布目をとどめる。12世紀末乃至13世紀初頭のものであろう。

江戸時代以降の遺物としては、丹波、信楽の徳利、伊万里染付などの陶磁器のほか、泥面子、土人形などの土製品がある。

4 小 結

この調査により、明確な建築遺構こそ確認できなかったが、当初地下はかなりの攪乱を受けていると予想されたにもかかわらず、平安末期を中心とする遺物包含層や、溝遺構を検出できたことは大きな収穫であった。しかし、京大病院遺跡における密度の高い包含層や遺構面との対応関係については結論を出し難く、また比定されている白河北殿に直接かわる資料も得られたとはいえない。ただ溝 SD1 からまとまって瓦が出土したことは、瓦葺の堂宇が近いと考えてよい。

同時代の遺跡である洛南鳥羽離宮跡では調査が継続されており、院の御所と御堂の建築遺跡が現在その実体を明らかにしつつある。にもかかわらず、ここ白河の地では、白河北殿・南殿という主要な御所について、未だに遺跡の遺存状況すら把握できていなかった。そうした中で、今回の試掘調査は、将来の遺跡発掘に期待をつなぎえた点で意義深い調査であったといえよう。